

問題

次の文章は、半年前に夫を亡くした作家、小池真理子氏によるものです。この文章を読み、あとの2つの設問への答えを、解答用紙に記入しなさい。

高原では、今、ツツジの花が満開である。緑に埋め尽くされた木立の中、一斉に咲きほこっている真紅の花は、空中にふわりと拵(ひろ)げられた一枚の緋(ひ)色の布のように見える。

隣のお宅の広い敷地の向こう側に、一本の大きなツツジの木が自生している。花盛りの季節、わが家の窓からふと覗(のぞ)けば、新緑の中に緋色のマントを拵げた人間が立っているのかと思って、いつもびっくりさせられる。

毎年、同じびっくりの仕方をして、そのたびに私は夫に「びっくりしちゃった。人かと思ったらツツジだったのよ」と言う。どういうわけか、一年たつとすっかり忘れて、また同じようにびっくりしている。その繰り返しだったのに、今年からはもう、それを口にする相手がいなくなってしまった。

月明かりがきれいな晩など、外に出てみると、梟(ふくろう)の鳴き声が聞こえてくることがある。オスとメスが呼応して森の中で鳴き続けている様子である。オスの声は低く、ほんの少し甘く、透き通っている。

私の耳には「ほーほー」とは聞こえない。もっと複雑な、うまく擬音化できない、森の木霊(こだま)のような声。月の光に満ちた森の奥に、梟の声だけが響きわたる。姿は見えない。羽ばたきの音もしない。なんだか儼かな気分になってくる。

梟の声を聞きつけるたびに、私は夫に知らせた。動物好きの彼はいつも、どれどれ、と言って夜の庭に出てきたものだったが、闘病するようになってからは、そんなこともしなくなった。夜気にあたって風邪をひくことを恐れたからだ。

病気がわかった後のこと。梟の声に気づいた時、部屋の中にいる彼の耳に届くよう、私は窓を少し開けた。風のない晩だった。梟の声は遠く近く、よく聞こえた。明かりを消した室内に青白い月の光が差し込んで、薄墨色の影を作っていた。萩原朔太郎の詩の世界みたいだった。

夫は元気だったころ、何度か繰り返し、面白いことを言っていた。「おれが死んだ後のおまえのことは想像できる。友達や編集者相手におれの思い出話をしながら、おいおい泣いて、そのわりにはすごい食欲で、ぱくぱく饅頭(まんじゅう)を食ってるんだ。ひとつじゃ足りなくて二つも三つも。おまえは絶対、そうなるやつだから、おれ、自分が死んだ後のおまえのこと、全然心配してない」

その時によっては、「饅頭」が「大福」になることもあれば「煎餅(せんべい)」になることもあった。

先日、ひとりで大きなどら焼きを食べていた時、そのことをふと思い出した。可笑(おか)しくて可笑しくて、ひとしきり笑いながら、気がつくと嗚咽(おえつ)していた。笑いながら嗚咽する、というのは、けっこう腹筋を使うものだということがよくわかった。

(1092字)

(小池真理子. 月夜の森の梟(ふくろう). 2020年6月6日, 朝日新聞)

設問 1

著者が「笑いながら※嗚咽」した理由について、あなたの考えを述べなさい（200字程度）。

※ 嗚咽（おえつ）：声を詰まらせて泣く、むせび泣く

設問 2

これまでの暮らしで、※五感に響く印象的な体験を思い出してください。どのような体験か具体的に記述して、感覚の記憶と人とのつながりについて、あなたの考えを述べなさい（400字程度）。

※ 五感：視・聴・嗅・味・触の五つの感覚。これらの感覚によって外界の様子を認識する。なお、この度の回答に五つの感覚の全てが含まれなくてもよい。